
タロット黙示録。

零詩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タロット黙示録。

【Nコード】

N9779G

【作者名】

零詩

【あらすじ】

×月×日、夜。平穏な日常を求める高校生、夢稀は自分の親父からいつものように「呪占具」を送られてくる。しかし、今回送られてきたものは何かわけありで……………？

序章：「ハジマリの世界。」 ~ Start Line ~

×月×日×曜日。天候曇りのち晴れだった。

やれやれと、俺は思ったよ。何故かつて？ そりゃあ、あんなものが親父から送られてきたからに決まってるではないか。また、今日から面倒なややこしい毎日が始まるんだからなあ。まったく……なぜ俺が二十三枚の呪霊譜八十年前の災厄の尻拭いをしなければならぬ……

この日記を書く、ちよつと前にその元凶がやってきたんだよなあ。

いや、普通に驚くだろ。宅配便でも何でもないので、こんな二メートルくらいの高さがある箱が玄関の前にあるなんて。

ぜつてーアイツだ。拓煉だな。……あのクソ親父め……帰ってきたら呪つてやるぞ？ つつても、またあのクソ親父の『動かないと死んでしまう病』が発動している可能性が高いから、当分帰ってこないだろうけどな。一応毎月生活用の金は振り込まれてるから、安心だが、それもいつ止まるか分からないからな。困る。

で、ここにいても仕方がないから運び込もうと位置をずらした。

自分から見えない方の側面に、紙を発見した。セロテープでガッチガチに止められていたがな。何もここまでしなくてもいいと思うのだが。軽くいやがらせか？

居間に運び込もうと担いだ。それ相応の重さだった。

家の中は和風の造りになっていて、昔の貴族の家を少し小さくした感じだが、中には洋風のもの、まあ、バスタブとか、キッチンとかも設置してある。純和風ではないが、昔ながらの縁側や納屋といったものも残っている。まあ、敷地面積はかなり広いな。普通の家の三倍以上あるかくらい。母屋以外にも離れが2・3個ほどあるし。ここいらじゃ指折りの金持ちだつてことに表向きではなっ

ている。表向きではな。裏の顔、つってもこっちが本職なんだけど、裏のお仕事、ヤのつく職業の皆さんとは違う。陰陽師とかと関係があるらしいけど、そのことはまた説明すると思うから今は伏せておく。

和風と洋風がコラボってる、俺の家のリビングにドサリと、先ほどの箱を紙の方を上にしておいた。で、早速剥がしにかかるが、これがまたメンドクせえ。

ペリペリペリペリペリペリペリペリペリペリペリペリペリペリペリペリ

うがあっ！ メンドクせえ！

紙は一枚の白紙の後に二枚ほど文字が書かれている紙があった。内容はこうだ。

………ちやーす！ こうやって書くのも久しぶりだなあ、夢稀。一応学校は頑張れ。馬鹿でもな。

で、本題な？ たぶんこれ読んでるちゅーことはさ、そこにでかい箱あるだろ。それ、いつものヤツってのは気がついてると思う。でも今回ののは一味違う………と思う。

ずいぶん昔の書物が、隆生んとこにあるんだけどなあ………・どうするかねえ………まあいいや。とにかく。頑張れ。その中身の物は『世界ノ始マリノ占具』始マリノ終焉』って、呪占具の起源だそうだとよ。で、まあ、その呪占具のチカラと、その憑依している屍がまた、古代エジプトのお姫様だそうだ。で、呪霊譜っていう力を制御したりするものが世界に二十三枚あるわけね。それを集めて、『世界ノ始マリノ占具』始マリノ終焉』の中に入れないといけねえんだってさ。めんどくさいとは思っけど、相手の方から寄ってくると思うから。目覚めたことはもう結構な裏社会に影響を与えてるしで、これを夢稀ん所に送ったわけさ。だから、二十三枚集めて『世界(elenan)(la)始)allte)マリノ(musclows)占)the)具)tarot)始)start)マリノ)next)be(終焉)over)』を封印するか

しないと世界が崩壊しちゃうわけよ。ってことでじゃあな！

お帰りのハグはよろしくね？

拓煉

なんじゃこりゃなんじゃこりゃ。もっかい言うけどぬわあんじゃこりゃああ！！

何がハグだ！ 訳が分からん、と突っ込むところを間違えるくらい、俺、中条夢稀は動揺した。

それでも一応俺のきちんと血の繋がった実の父親だ。どんだけチャラいんだよ親父。何とかしてくれ。あんたは俺と同じ年の人間にでもなったつもりか？ やめろ。いろんな意味で。だいたいなあ……

(割愛させていただきます)だから、やめておけ。以上。

と、思わず現実逃避にえんえんとながい愚痴をいま此処にいない親父に向かって言い放ってしまった。本題の方に戻る。……とはいったものの、意味が分からないのが現実だ。何、呪占具ってことはどうでもいいんだが、エジプト王妃？ 呪霊譜？ 世界の崩壊？ まったくもって現実味がないな。だが、この箱があるってことは現実なんだろうな………はあ。面倒くせえな。よし。飯作るか。頭が正直言っつてそこまで強くない俺は考えることをやめて晩飯がまだだったことに気がつく。そして、すぐさま実行に移そう。今日は魚焼いて、ありあわせのものでいいか。そろそろ食費がヤバいかもだからな。安いもので済ませてしまおう。でも冷凍食品は使わない、それが俺のポリシーさ。

思い立ったら即実行するべく、立ち上がると先ほどの箱に不審点を発見した。

穴があいていいるのですがっ！

何故に！ じゃなくて、何処に行った！ ……まあ害があるわけでもないし、飯が優先事項だな……。

そう俺の頭は能天気な軽快な音を出してそう答えた。

で、とりあえず食材を取りに。冷蔵庫にも入っていることには入っているのだけれど、今は自作の野菜を取りに行く、つつても、すぐそこだけだな。今はニンジンあたりか？ たぶんサンマもあるし、それとなんかで作るか。

そう言いながら手際よくエンジンを収獲し、母屋に戻る。……正確に言うと母屋のキッチンに向かうだが、そこでまためんどくさいものを発見したんだ。冷蔵庫を漁っているめんどくさい奴を。

少女がいた。腰ほどまで伸びる炎のような赫い髪、整った顔立ち気高さで気品が互いを象徴し合うように溢れている。そして、髪の色とは対照的に銀灰色の雪のような瞳。ほっそりとした四肢に、透き通る肌。に、なぜか俺の部屋の毛布を体にくるんでいる。そして冷蔵庫を開けて何やらごそごそと探している様子。俺にはまだ気が付いていない筈。

そう思いながら、俺は息を殺して冷蔵庫の位置から死角となっっている角二棒のように立つ。ちらちらと横目でその少女を見ながら、確認してみる。

どれぐらいの時間が経っただろうか。っていうフレーズがぴったりに思えてくるくらい俺には長く感じた。一分が一時間にも感じるみたいだ。

ぴくりと奴が体を動かした。俺の体が反射的にビクツとなった。その瞬間さつき採ったニンジンさんがお空にダイヴした。流石にヤバいなと思って、空中に手を伸ばしたのが悪かったな。その瞬間俺の世界が反転っていうか、廻ったっていうか、吹っ飛んだ。何か、固い物で打たれた感じだ。Le Bateauと読み取れる、灰色に近い色の鉄鎚を持っている少女。重そうなそれを軽々と持ち上げて振り上げた様子。だから俺は吹っ飛んだのか、ちなみにもう片手には食べたい物が見つかったのか、真っ赤な色の林檎がその小さ

な手に握られていた。カリッと、新鮮味のある音が聞こえると、林檎を口から離して第一声がこれだ。

「貴様……………何者だ、名乗れ。名乗らなければ」

まずお前がな？ 人様の家に侵入しておいてその台詞はないだろう。でも次の一言で、こいつが侵入してきたわけではないことが分かった。なんせ

「……………surnaturel（呪うぞっ！）！！」

そう叫んだ瞬間に少女と俺の志向がフリーズする。はらりと落ちたのだ、あれが…………毛布が。で、下が生まれたまんまの状態だったから、もう大変だよ……………なんかいろんなそこにあつたものを投げられるわけで、大変だ。顔をゆでダコみたいにしてたし。それとsurnaturel（呪うぞっ！）！！
とも言われたし。もう散々だよ……………
はあ……………

俺は平穩に暮らしたいだけなのにな、なぜいつもこうなるんだろう。

嗚呼、恵まれない俺に合掌、それと、

また、厄介なのが来た……………

「……なんだこれは？ 先ほどレイゾウコとやらに入っていたのはずいぶん違うのだが？」

器用に箸を持ち、目の前に置かれた皿を、じーっと見つめ（睨みつけ？）いった。

「まあそうなんだが、ちょっと細工してみた。何を入れたかわかるか？」

「ふむふむ……こ、これはっ……」

箸で少し中身をつまみだし、口の中に放り込むと、大きな真ん丸の目をこれでもかっというくらい見開き、フリーズ。

「……これはこんな味なのか！？ そもそも、この感触は……」

そこまで言ったところで、コイツの腹が、ぐううう……と啼いた。そこで、コイツはぼんつと音を立てるような勢いで赤くなる。

耳から湯気でも出そうな勢いだ。

「う、うるさいっ！ 笑うなっ！ 貴様、割るぞー！」

あながちウソに聞こえない。

そんな感じに苦笑いしつつエプロンをソファの上に投げ、コイツの座っている場所の反対側に胡坐をかいて座る。とりあえず毛布は返してもらい、服は俺の寝巻きを使わしてやった。

まだ頬もほんのりと赤く、だが不機嫌そうな顔で、創作料理を口にしている。……とりあえず成功だ。食べ物を与えることはできた。

親父も明音には苦労したもんなあ……などと、聞かされていたことを思い出しながら、こいつのほうへ視線を向ける。そして本題へと移る。

「で、エレナ。あ、ちなみに長かったから省略しておいたぞ。エレナに。で、本題に移りたいのだがよろしいだろうか？」

「なぜ私の名を？ 確かに私はエレナだが……まあよい。続ける」
多少は驚いたのか大きな目を少し見開きながら答える。だが、少し

先ほどの勢いが無い。そこまで名前を知られたくなかったのか？

「で、エレナ。早速だが、お前はなんだ。何なんだ？」

あくまで優しい口調で語りかける。が、

「う、うるさいわっ、貴様には関係ない！ どうでもいいだろう！」

「どうでもよくはない。まず第一に、この家にお前は送られてきたのだから、俺に所有権がある。第二に、お前は小一時間前に、俺がすべきことの最優先のところ、ピラミッドの頂点に立ったのだから、知る権利がある」

立ち上がり、眉を釣り上げて怒るエレナにあくまで正論で返答する。

「うう……………」

うめき声。

「うっ」

「うつつつつつつるさいわっ！ 貴様、ただじゃおかんぞ！」

ついに戦闘のか前になったエレナ。しかし先ほどの鈍のようなものは出さないようだ。しかし、

「口の周り汚れまくりだぞ。ほれ」

ティッシュ箱を投げてやる。

「いちいちいちち五月蠅いのだ！ お前は！ s u r n a t u r e 1 (呪うぞっ！) ！！」

「話がずれた。元に戻そう。お前はなんだ？」

何かギャーギャー行っているが、俺のことを何か言ってるようだが、ちよつと心が痛いなーなんて思ったりもするが、あえて無視。

「お前に関係ないわ……………このバカ者！」

「あんたはどこぞの国民的アニメのおっさんか」

と突っ込んでみるが、唇を尖らせ少し不機嫌になりつつあるエレナを見て、ひとまず謝る。しかし、あまり機嫌は直りそうもないので立ち上がり、エレナの頭をわしわしとなでてやる。これで少しでも気持ちが和らいでくれればい……………

「そんなことで私が許すとも……………？ というか女の過去を根掘り葉掘り聞く馬鹿がどこにおるのだ」

……あながちではなさそうだ。口ではこう言っているものの、表情は幾分か和らいでいる。

「とりあえず、お前らみたいなやつは過去の過去は、あんま楽しい話じゃないことくらいはわかってから、怒らしてまでは聞く必要はないな」その言葉にほっとしたように肩の力を抜く。そして俯く。

「あの姿。タロットの姿は嫌いだ。できればなりたくはない。あの地、思い出すだけで身震いする呪われた地から連れてきてもらえるのなら、と思った。あの姿になっていたのも、ここに来やすいという理由でだ。確か、中条拍煉と言う奴に。お前はあいつと血が繋がっているのか？」

「……親父はどうしてた？」

やや苦笑しつつ言う。苦笑した理由は簡単。自分は毎月生活費が口座に入れられるだけの放置プレイ状態で、電話はおるか手紙だつて気やしない。それなのに、エレナの話によると、そこは呪われた地つてとここで、何かの遺跡か何かだろう。どこほつつき歩いてんだ、あのクソ親父。早く帰ってこいつつの。

「拍煉か？ 本当なら一緒に来るはずだったのに、前日に消えた。」もう呆れて声も出なくなつた。

……やつぱり。またクソ親父の、『動かないと死んでしまう病』が発動したか……今はタイか、インドか、ベトナムか……とにかくまた自分は帰ってこないだろう。はあ。

「話を元に戻すぞ。お前は私のようなものを知っておるといったな。どのくらいまで知っているのか、答えてもらおうではないか」

親父を心の中で貶している、先ほどであった時と同じ声が現実世界に引き戻してくれた。その説明は、以前、俺も親父から、というより親父の友人の霊媒師とか言う奴から聞いた。

「つと。まず俺が知ってるのは、お前たち、が、呪われし物、まあ呪占具ということ。二つ目は、お前たちみたいなやつ、人と同じような体を得た者は、人間との錬金術で融合されたもの、または、死体に呪占具の魂が入り込んだもの、のどちらかということ。三つ目

は、この場所が、お前たちにとって、よい場所であること。ここは、そういう呪いを拭い取ってくれる場所なんだとき。だからここにいれば自然と、普通に呪われたものは浄化することができる。あと一つ。まあこれは俺のことなんだが、俺は、俺自身の持つ能力とここにいる御蔭でそういった呪い、身体を蝕んでいく呪いに耐性がある……というか、全く無害なの？ 俺には。これで俺の知ってることは全部」

ここまで一気に言い終わると、一つ言い忘れていたことがあったことを思い出す。エレナが口を開こうとしているがそれを遮り、俺は自身の持つ能力『暁ノ零レタ朝』という目に宿る能力を開眼させる。「お前の呪い……人を人で失くしてしまう、内から破壊していく呪い。そうだろ？ ……まあそうだとっても、ここでは肩の力を抜いて過ごせよ？」

それを言い終えると、すっかり中身を抽出してただのお湯を赤茶色に染めたパックを受け皿にとりだす。ついでにエレナのも、だ。

エレナは俺の話を実剣に聞いてくれた。

そして今、何かを考えているように黙りこくっている。何を考えているのだろうか、俺には到底理解できない。瞬きもせず、じいっとメートル先の廊下を見つめている。と、不意に口を開いた。

「つまり、お前には、私の、呪いは、発動及び侵蝕することはないと？ そういうことか？」

言葉を選びながらゆっくりとこういった。目には嬉しさ、驚きとかの感情がたくさん入り混じった感じがする。もちろん不安という名の違和感もエレナは感じていただろうが。もちろん俺には何の影響もないからエレナにも負担がかからないし、俺の体はその呪いに蝕まれることもない。そして、この場に入れば自然に呪いの効力は薄れていくのだから、一石二鳥。俺にとっちゃ一石三鳥だ。……言っではないが、俺の目もれっきとした呪。この呪を俺が使っている間は少しばかりエレナの呪いが俺にも聞いてしまうのだが、それを言ったら、確実にどこかに行ってしまうしそうな気がするから言わない

でおこつ。明音やレイにも言っていないし、……っつーか言ったところで、何で言わなかったの！ とか言って怒られそうだしな。なんだかんだでこれでいいのかもな。よく言わなかった。俺。褒め称えるぞ。

「……さつきから思っていたのだが……」

エレナがその後の言葉を口にしようとした時、タイミングよく、玄関の方から音がする。

ぴんぽーん。ぴんぽーん。

その気の抜けたインターホンの音にエレナはビクツと反応し、俺の後ろに隠れる。何が怖いんだか。俺が思うに、まず明音の可能性が大だろう。

ぴんぽーん。ぴんぽーん。

もう一回インターホンが鳴った。このままでもいいのだが、流石に明音が可哀想だ。後ろにエレナをひつつけているので、もう一回インターホンが鳴ったところで、ドアをガチャリとあける。結果。

二人いた。一人は見慣れた顔。茶色の腰くらいまでの髪、母親を連想させるような優しい瞳。そしてゆったりとした服でも、十分大きく見える、胸の膨らみ。いつもどおり、今まで通りの姿の羽柴明音だったから正解。もう一人が思いもしなかった。ショートの翡翠色の髪の毛に、ポーっとしているような、何を考えているのか分からない翡翠色の目。その片手に、俺じゃ到底わかりっこない小難しい分厚い本を片手に明音の横に立っている。そして、明音以外の所有地に住んでいる人の二人目。蘆名レイだ。そして、隣には羽柴明音が手に鍋。しかも土鍋を持って立っていた。エプロン姿で。

……なんだこのコンビ。格好からして限りなくミスマッチだ。

「こんばんは。ねえねえユウ、これ作ったはいいんだけど、作りすぎたから、一緒に食べない？」

……ようするに、一緒に晩飯を食わないかと。返答？ もちろんOKに決まっておろつ。エレナに食われて何も食ってないもんな。ちなみに、明音は別に俺の彼女とかそついうのではない。いろいろ、

このいろいろはあとで話すと思うが、俺の家の一角を少し改造して、自分の家のように住んでいる。

「……で、そのコは誰なの？ 髪の毛が赤いユウのシャツの端っこをつかんでるコ。誰？」

やっぱりそうきたか。そりや当り前だろう。いつも知っている家にお宅訪問していきなり知らないコがいるんだもんな。

しかし、何度もそのコと言われ、三人の視線、特に明音とレイの視線にいらついてきたのか、頭に井桁マークを浮かべて言った。

「……ユウとか言ったな？ こいつらは誰だ。百文字以内で説明しろ。今すぐにだ。特にそのの、やたら胸にえらく重そうな脂肪が付いている、奴。こいつに関して百文字以内だ」

……ああエレナにまだ俺の名前、言っただけでなかったか？ でもとりあえず此処にいるのもなんだから、家の中に入れて二人を促す。二人ともそれについてきてくれたようだ。レイはいつも通りの無表情。

明音の方は頭に井桁マークを六、七個浮かべて、無言でついてくる。……俺んちの物は壊すなよ？

と、あつという間、と言っても普通の家よりは少し長めの廊下を通り抜け、居間にあるソファに促す。ちなみに土鍋はとりあえず俺が台所に置いておいた。今の明音なら土鍋を真つ二つにして中身がぶちまけることぐらい容易だし、今はやりかねないからな。

微妙にぎすぎすした雰囲気の中で、とりあえず話を進めようと思う。「え〜とだな……、とりあえず自己紹介？ 的なことをしようと思う。」

そのまま皆無言。エレナは何やら固まっているし、明音は井桁マークをいまだに頭に浮かべて、無言でこちらを見ている。……俺にどうしろと？ レイはレイでいつもの読書を始めちまうし……。みなさーん？ とりあえず私の話を聞いてくださいませんか？ しょうか？

とりあえず話が進まないの、まず明音とレイにエレナについて話そうと思う。

「こいつは、エレナ。まあ、お前らが来る2、3時間前位に、拍煉から輸送されてきた。ちなみに拍煉は音沙汰なしだ。前日に逃げたらしい。こいつは呪占具。俺の目でみたけど、コイツの呪と錬金術の結合率は100近い。っつーことで、俺の2個目の、呪占具。という事で」

と、説明を簡単に終わらせる。一緒にいればいつか分かることもあるだろうしな。

そして今度はエレナにレイと明音の説明をする。

「まず100文字云々は却下。理由はめんどいから。簡単に説明すると、まずそっちの読書している方は、真田レイとってな、平たく言うと、お前と同じ呪占具だ。詳しく言うと俺の一番初めに所有した呪占具だ。能力はいずれわかるだろうから、……っつか、説明できん。分からなさすぎて」

それは本当のこと。いまだにレイの能力が正しくわかるわけじゃない。簡単に言うとレイの能力は、『自分の想像を現実に映し出す』ことらしい。もう殆ど見ていないからよく分からないがな。何せ1、2年前位に、なんか『聖戦領・赤』なる相手に、腹かなんかを、呪占具で刺されて、瀕死って時に、レイの想像、いや創造と言った方がいいのか？ こういう場合。で、レイが創造したこと、教えてはくれなかったけど、創造の中では完全治癒を考えてたんじゃないのかな？ レイもアレだ。根は人間らしいところが備わっているからな。あいつも元は人間だと思っし。今度訊いてみるか。言ってくれるかどうかは分からないけどさ。

おっと。話が逸れた。元の話に戻そう。そう頭の中で自分の声がエコーする。よし！ 説明開始だ。

「で、お前がさつき、胸部に余分な……うげっごめんなさいいまでもんも言いませんだからその手を引っ込めてえ！」

さきほどエレナが言った言葉をリピートしようとしたら、頭にゲンコツが降ってきそうになった。……無言で。当たってりゃしばらくは復活できないだろうと思われる。

話が逸れた。次。

「それで、こいつが、幼馴染ってことになっている、羽柴明音。ヨロシクしてやってくれや？ 二人とも？」

二人に、さっきから障壁のオーラが出来てる気がしたから、付け加えといた。仲良くしろってな、これぞバリアフリー精神。

そして言わなければならぬことがある。俺が口を出す前に固く結んでいた口を開こう押しているエレナが目に入ったので、そのまま言わせてやる。

「では、こいつは呪占具ではないのだな？ つまり普通のニンゲンということ。それなら何故、私の存在を知られてもよいのだ？」

尤もな答えだろう。心の中で俺は頷く。そして一番大事なこと、今、言わなければならぬことを口にしようとする。

「その理由。何故なら、明音は」

唯の人間じゃないから。

もっと詳しく言おう。

明音は言いたがらないが、戦国時代とある錬金術師が日本に生まれた。その実験体第一号が明音ってとこだな。一号ってことで不完全なのだが、確実に人間ではない。なんせ、明音は自分の体を獣、しかも幻獣の形に変化させることができるのだから。本人曰く、空間の狭間の世界の住人たちの力を借りているだけ。と言ってるが、そもそも戦国時代つつたら江戸時代より前の時代だぞ？ そんな所に空間の狭間の概念があったのかどうか……。まあ本人がそう言っているのだから仕方がないが。……確かめることなんてできる筈が無いのだからな。しかも歳を取らないまま、今の姿だし、もしも実験体になってなけりゃ、とつくのとうに死んでんだから、まあいいんじゃない？ って感じ。

「というワケ。分かった？」

よし。俺なりに上手く纏められたみたいだ。これで多少はわかっ

てくれたのかな？

「……ふん。別に単にそいつが化け物だという事は十二分によく分かった」

多少はわかって……

「そつちだつて、禍々しいモノという意味では同じでしょうが！」
た、多少は……

「なにおう！」

「やりますか！」

多少は分かってなかったみたい。せめてレイ位は……

「……」

もう既に読書に戻っている。聞いちゃいねえ。

少しは話聞いてくれるのかな？ もうなんか、皆が皆、好き勝手だし……少しは話を聞こうよ！ グレるぞ？ 俺。

若干半ギレ気味で、睨み合っている二人の頭に手を乗せて、喧嘩（？）の仲裁に入ろうとする。

「まあまあ……二人とも。やめなされ。争いは何も起こさな……」

「ユウは黙ってて！」

「黙れ」

二人に一蹴される。

そこで今、思ったのだが女同士の争いはこの世の何よりも怖い。とな。言ったら殺されるから言わないでおくが。

そこで、もう何を言っても一蹴されるのがオチだから、俺は立ち上がって、台所へと向かう。

理由はもちろん、明音が持ってきた土鍋を取りに、正確には中の料理を取りに行く。

こういう時にはなんてったって美味しいものを食べるのが一番だし、それは俺が一番分かっているはずだ。

……あいつらと付き合っていると嫌でも分かってくるぞ。

どたどたと廊下を小走りに走って、三人がいるところに戻ろう

とするが、廊下の半分くらいで、さっきの悪寒とよく似た感覚が背筋を通り抜ける。……… ったくよお……… 今日勘が当たるからなあ……… 何が起ころのやら。

そんなことを感じながらも、残りの廊下をやっぱり小走りで走り出す。

「お前ら、飯」

そこまで行って、俺、本日二度目のフリーズ。

かるく地獄絵図だった。

タンスや机はひっくり返され、障子には穴。いろいろと物がぐちゃあつゝとなっていて、明音とエレナは二人して肩で息をしている。ちなみにレイに至っては、はじっこの方で、まだ本を読んでいた。どんだけ好きなんだよ、本が。

「……… 止めた」

さいですか。止まってねーぞ？

「お前ら……… 暴れるのだけはヤメロ。と言ったハズだが？ 明音。

お前は年上なんだから、何があつたかは知らんが我慢しろ。エレナ。お前は一応新人なんだから喧嘩腰になるな。後が怖いぞ。それとレイ。もう少し止めてくれ？ これは俺からのお願い」

「うっ」

「むう」

「………」

三者三様の反応。そりゃそうだろう。

とりあえず、足が上を向いている机を持ち上げて元に戻す。そして、ひとまずレイに持ってもらった、鍋を机に置く。そして、これはレイには持って貰っていなかったけれど、安全な所、安全つつつても、被害が及んでいない所に置いておいた、食器、俺、エレナ、明音、レイの四人分の食器。それを、二つずつ対になるように置いて、三人に声をかける。

「おめーらあーとりあえず、飯！」
やれやれ。

これで飯にありつけるわ。ああ腹減った。

レイはいつも通りの無表情で、自分で直した椅子の上にちょこんと座る。明音とエレナは、ひとまず休戦と言わんばかりに椅子に座る。四人で鍋を囲み、蓋をあける。もちろん俺が。

むわぁつと、白い気体が天井に向かってゆらゆらと伸びて、途中で消えてなくなった。中身はもちろん鍋料理、と思ったのが大間違い。炒飯だった。何でこのタイミング？とも思ったが、毎度毎度のことなので、あえてスルーする。そこそこ美味いな。

俺は炒飯を自分が用意した器に大盛りによそう。ぱくつと一口と口に入れる。あ、美味い。

三人+俺の四人は、自分のタイミングでそれぞれ食べ始める。

皆の食べるスピードが、若干遅くなったところで、先ほどから俺らが何もしゃべっていないことに気付いた。……どんだけ腹減ってたんだよ俺ら。というワケで、話を切り出すことにした。

「……っつーか、もう時間ヤバくねえ？」

もう時計は短針が十二に近く、長針が六のところを指していた。

つまり、間もなく深夜。……よくここまで俺の腹は持ったな。普段なら七時にはもうグウと鳴っているのになぁ……

「あ、ホントだ。どうする？レイは？」

「……どっちでも」

いや。レイ。どっちでもじゃないだろ。どう意味だそりゃあ。

つてなわけで、今日のところは二人に帰ってもらうことにした。

明日学校でつて感じにな。

そんなところで、インターホンが鳴る。

ぴんぽーん。ぴんぽーん。

ぴんぽーん。ぴんぽーん。

ゾクリ。

冷たい感覚が、背筋を通り抜ける。さっきの郵便配達のおっさんや、明音、レイとは違った感覚。

それでも出ないわけにはいかないから、恐る恐るつつても多少は

早めに玄関へ。……ほんとなんなんだろう。この感覚は。あ、鳥肌。
「は……………ぐえっ」

ガチャリと開けた瞬間。視界がぶれる。苦しい。何か骨のように固い黒々としたもので首を締めあげられる。とっさに明音とレイを呼びよせようとするが、声が出ない。かすんでくる目で締めあげている者の持ち主を見る。

茶色の髪。赤のロングコートを着ている。そこまではいいのだが、顔の部分。鼻から上の目の部分が白い骨のような仮面をつけている。そして、背中部分のロングコートが破れており、そこから、今、俺を押さえつけている、黒々とした物体の中心となる、身体にくっついてる部分が姿を覗かしている。恐らく『聖戦領・赤』の奴らだな。うん。

そんな解析をしている間にもその物体は、俺の首をぎりぎり締めあげてきている。もう意識が飛びぎりぎりだ。ぐう………そろそろヤバいかもな……『暁ノ零レタ朝』を発動しているおかげで何とか持っているけど、もうマズイ。

「ねえ。キミ、中条夢稀だね？ っていうか、この家の男の子っていったら彼しかいないだろうけどさあ、一応聞いておくね？ あのさあ………ここについさつき、『世界ノ始まりノ占具』始まりノ終焉』が届かなかった？」
こいつ何で知ってやがる。

何故こいつは、エレナが来たことを知ってやがる。
無言。向こうは沈黙を肯定と理解したのだろうか。

しかし相手は、少し顔を歪めたかと思うと、ロングコートの内ポケットのところに手を突っ込むと、時計を取り出し、それを見た瞬間、わずかに舌打ちをしながらも平静を保ち、

「まあいいよ。僕は十二時までしか活動できないからね。また迎えに来るから。始まりノ終焉を、ね」

そう言うと、俺を、拘束していた物体が砂のようにさらさらと流れおち、そしてその持ち主はどこかに消えた。

黒い砂は廊下につもり、俺は明音やエレナ、レイの足を戸を聞いて、意識を手放した。

「まったく。ひどくねえか？ 夜だぞ？ 夜中。気が失って、朝叩き起こされて、学校だぜ？ 一日くらい休ませろつての。」

「まあまあ。生きてるんだからいいじゃないか。ねえ、夢稀」

今は、時計の長針と短針が位置のところでも重なったくらいの時間ももちろん午後。そして場所は屋上。昼休み。というヤツだった。

そこで俺は、学校の仲間であり、唯一俺の家の事情を知っている奴、多賀谷隆生に、昨日のことを報告してみる。隆生はいつもの通りの笑顔で受け答え。少しは真面目な顔をしたらどうだ。モテるぞ。と、嫌み半分からかい半分で言ってみた。

「いや？ そういう問題じゃないでしょ」

「やっぱり素の笑顔のままだった。くそう。」

それでも多少は真面目に話を聞いているみたいで、俺の話に乗ってきてくれている。こいつも、そういうことには興味があるようで一般人ながらも俺らとともに行動することが多々あった。……俺より頭いいし、計画などはこいつが主に立てて、実行に移すのが俺や明音や、レイ。てな感じ。一般人には不可解なことを俺たちはしているんだから、普通の人間が見たら、倒れるか、逃げるか、……まあそんな感じのことが起こるであろう。

「で、その顔に仮面の男の話をもう少し詳しく聞かせていただけませんか？」

「いいともさ。というわけで話してやる。」

鼻から上の部分が白い骨のようなもので覆われていたことや、視界が掠れてよく見ることができなかつたが、何か模様が入っていたはず。服の様子は。……みたいなことを取りあえず分かるだけ言ってみる。それを言っただけで何か閃くんだったら、俺はお前を褒め称えてやるよ。絶対にわかるわけがない。そして言った。いつものニコ

二コ顔で。

「わかりました」

何がだ！

訳わかんねえ。もう一度言う。何がだ！

「少し待っていてください。ちょっと持ってくる物があるので」

そう言うって、本来なら入ることは禁止されている、屋上の出入り口から出て、たったたつと階段をリズムカルに下りていく音がだんだん小さくなっていく。そしていつもの定位置の屋上の貯水タンクの上に座りなおす。……たく。何が分かって言うんだ。

「なあレイ。どう思う？　つか何時から居た。全く気がつかなかったぞ」

なんだかんだ言うって存在に今気がついた。どうして気がつかなかったのだろう。何時もって訳じゃないけど、結構一緒にいる時間があるのにな。その影を薄くする能力を俺にも分けてくれ。先公に問題をあてられないようにそれを使用する。そっちの方が有効だろ。と、脳内でしゃべる。なんか本当に教えてきそうで怖い。「普通にしておくだけ」とかの返事が来そうだし。やめておくか。

「一つ目。分からない。恐らく書物などの情報から得た物と見られる。二つ目。さつきからいた」

二つの問いに声のテンポ音調を変えない、無感情の言葉を手にしている分厚い本から目を離さずに放つ。もう少し感情を込めてほしいものだ。せめて俺の前くらいは！

「分からない」

何い！　なぜ俺の心の声を！

「言ってる」

まじでか。もういいや。そんな感じに手を広げ大の字にな後ろに倒れこむ。そんな所に、空気を読めない、俗に言うKYがやってきた。めんどくさい言葉とともに入ってくる。

「お邪魔でしたかね？　二人の間に新しい関係が

「「ないない」」

珍しくハモる。何故だ、レイ。何故ここには少し感情が入る。誰か教えてくれ。お前がいい！ 前頭葉！ 教えてくれ！ ……これ以上脳内で会議をしていると声に出すことになりそうになるからやめておくか。シヨートする可能性もあるしな。

「では、話を元に戻しますね。これです」

なんだこれは。見りやわかる。単なる、ごくごく普通の古い本。しかし古さが尋常でない。紙が世界で使われて間もない時に書いたんですかって言う感じの古さ。どこか骨董品売りにでも持って行ったら、ウン万円位は手に入るであろう。

「これの421ページくらいに乗ってると思うけど……」

キーンコーンカーンコーン。キーンコーンカーンコーン。

あつという間の昼休み。おっと。そろそろクラスに戻らないと、先公に怒られちまう。急がねば。……次の授業、英語か、無理だな。寝るか。

「おやおや。じゃあ放課後クラスに伺わせてもらうねってことで」そう言うと、さっき来たばかりの階段を下りていく。それを見ると俺たちも急がないとな、と思い、隆生の後を追うように出入り口に体を入れる。

とつたつとつたつ。

一つぬかして階段を下りていく。後ろからレイが本から目を離さずに降りて、俺の後5m位で付いてくる。同じクラスなんだからしゃあないな。ちなみに俺とレイは同じクラス、明音は別の組という別れ方。……そういえば、この学年になってクラスが書いてある用紙を見ると、明音は本当に悔しそうに何かをつぶやいていたけれど、何があったんだらうな。レイとなりたかったとかだらう。恐らく！

ガラッ

全員の注目的。やべえ。

「……おい。中条お！ お前、授業はもう始まってんだぞお！ 何

やってたあ！」

はいっ。屋上で寝てました〜。

なんて言えると思うか？　くう流石だな！　新任教師、二本松！　その教師とは思えない生徒をギロリと睨みつけるその眼はまるで猛獣のようだな！　わはははは……。

「すつすんません！　ちよっとトイレに籠ってまして……」

頭を掻きながらそう答える。……だつてなあ。あんなこと言えるわきゃねえなる……っ怖え怖え。あいつの機嫌でもとつとかないと俺の身体が持たんからな。もう二度と食らいたくないわ、あのすべの質問に当てられるという地獄……あの日は羞恥と、ダルさで頭の容量を思いつきりオーバーしてしまったから、大変だったぜえ、嗚呼、嫌だ嫌だ。もうあんなこと二度とやりたくないさ……

さ〜つてなんだ？　何の語尾だ。訳が分からん。

「はあ……座れ。授業を再開するっ！」

こいつ近いうちに血管切れるな。そうに違いない。

〜次の文を英語に直せ〜

今日授業に遅れてすみませんでした。今後は気をつけます。

〜遅れた理由を英文五行以上で答えなさい〜

〜これが終わったら、いままでの授業のレポートを提出せよ〜

くそう……二本松はこの俺を殺すのか、殺そうとしているのか？

この俺にかけるわけがないとわかっていて……。くそう、こんなことで俺は死にはしないぜ！

「 というワケで、教えてくれ！ 明音え……お前だけが頼りなのだ……」

自分でも情けないくらいに下手に出ている。しかしだなあ……分らないものはしょうがない、とでも何処かのお偉いさん、ここで言う二本松氏に猛烈に抗議の声を聞いていたただきたいのだが現実的にはそうはいかないのだと今改めて痛感する。

「どんなわけで……？」

そこか。そこなのか。そこに着目するのか明音よ。下の部分に反応してくれよ。せめて。

「しょうがないね……と。何が分からないの？」

見りゃわかるだろ？ それともあえて聞いているのか？ 全部だよ全部。わからねえ。つつか何で皆分かるんだらうなあ……さっぱりわからん。

「はあ……少しは勉強してよね？ 全くさあ……。次からは教えなから」

すみません。すみません。どうしても馬鹿なんですよ。てな訳で教えてもらえないとただひたすらに困るんで、それだけは！ せめて授業中のノートくらいは見せてくれ……

「クス……えつとここは」

笑った。……ちよつと傷ついたのは毎度のことだが。

夕暮れ時のこのクラスには、お日様がもう「おやすみなさい」全国の皆さん！」的な感じで言う頃にまで続いていた。そして、明音の声と、俺の悲鳴が教室内に響き渡っていたこともないような気がする。

帰路。時間は7時前位な筈。メンバーは四人。前から、

俺 レイ

隆生 明音

の順番。

会話が尽きん。

学校であった出来事。

今日のこれからの予定。

自分自身の話。

授業中に思ったこと。……とかいろいろ。

で、これからの話。

「そういえば、昼休みの時の、本を渡してなかったよね？」

と隆生が言った。そういえばそうだったな。で、内容は？

「ここ、ここ。この部分。この英文」

おい隆生。お前は俺に喧嘩売ってんのか？ さっきまで英語の課題でい残りだった奴に、それを差し出すのか？ それとも俺への宣言戦布告か？

「違うよ。ごめん。それでは和訳しちゃていいかな？」

世界が終る。

この世の中は、悪くなる。

全ては、呪われし道具を作り出す錬金術師のせいだ。

それによりこの世の中は、終焉へと導かれている。

呪いの道具によって、世界は終焉へと導かれている。

呪いの道具、所持する貴族、民。この全てを赦してはならない。

砕き、破壊し、拷問し、殺し、磔にせよ。

そのために私は民を集める。

呪いによって、迫害された者。彼らを集め、新たな肉体と、精神を
与える。

肉体に、その受けた呪いを形とした禍憑をつけ、

そして、その民の名を聖戦領とし、

全ての呪われし道具を破壊する。

最大の標的は、呪われし神、始マリノ終焉。

奴を破壊し、世界の終焉を止める。之が私たち呪制騎士戦領の役割。それが私と民とが生きる道なのである。

この書は、我が呪われし道具であり、呪占具、『世界ノ始まりノ占具』始まりノ終焉』の十三番目の呪霊譜の『鬼神』十三ノ星』を封印する。

みたいな感じかな？

……じゃねえよ！ 何を呑気に訳してんだ！ アブナツこの本アブナツ！

隆生のいつも通りの笑ってる顔、微妙に引き気味な顔で俺を見る明音、相変わらずの無表情のレイ。

今この時間が俺の突っ込みのためにあるんじゃないだろうなあ？

「違うよ？ 訳しただけだし。まあ……アブナイのは確かだけど」
もういい。詳しくここで言うな。俺の家にこい。

「私も行っていいかなあ？ 勉強もあるしね」

まさしく、『ニヤリ』と言っていいような笑いを見せながら明音。

「……私も」

短く自分の要件を言うレイ

よし！ きまり。俺の家にレッツゴー！

下り坂の下、俺の家の屋根が見える。薄い蒼の屋根、空と同じ色。

その屋根が見えてきたなら、俺の家はもうすぐそこ。走って一分足らず、歩いてもそんなにかからない。でも、隆生を見てみると目が合った。そして二人で頷くと高校生が柄にもなく、下り坂を走って下っていく。そんな俺ら二人を見て明音も「ちよ、二人とも！ まってよお」と言いながら短めのスカート　あと少しで中の神秘的なものが見えそうなんだよな　をパタパタさせて下りてくる。その後無言でレイも、たたたと下りてくる。なんかの青春ドラマのワンシーンみたいだ。夕暮れに走って「あの太陽を捕ま

えましよう」的な？ そんな感じのイメージだな。俺の頭の中は。でも、でもな？ このあと、ヤバいことになるなんて誰も思わないよな？ ましてや、自分のうちの中があんなことになるなんて思いもしないよな？

……前のリピート。

まったく。入った瞬間に唾然としたね。俺は。他の奴がどう思ってるかなんて知ったこっちゃないけどさ、流石にレイでも吃驚するだろこれは。

そう思ってチラリと横目がちにレイを見てみるけど、特に変わっているようには見えない。何でこんなにも驚いたりしないんだろう。感情が希薄すぎてこっちが吃驚だわ。

で、前つっーか前日の夜。およそ二十時間前位に起きたこと。まあ……平たく言うと、

ザ・めちやくちや。

「ぬわぁんじゃこりや
めちやくちやつぶり。むしろ前よりひどくなってる。本当に叫びたい。でも叫ばないけれど。だって、筆筈が半壊されているやら、食器棚が倒壊。皿の破片の散乱。こんなことをやる（できる）人物は大きく考えて二つ。一つ目の考え！ 泥棒。って思ったけど、こんなに倒壊させるわけがねえ。狙うんだったらあっちの呪占具の倉庫か、金だろ？ こんなことはしない。しないっいたらしない！

二つ目の考え！ アイツ。エレナだ。……ハイ即決定。

「明音、レイ、エレナを捜すぞ。恐らくどっかに隠れてると思うから」

散策開始。

隆生が僕は？ と尋ねてくるが、こいつはエレナを知らないんだから意味がない。とりあえず、食器でも片付けといてくれ。

「うん。分かった」

嫌な顔一つせず台所に向かう。こいつは人を疑うことを知らんな、つくづくいい奴だな、片付けの手間が一つ省けそう。後で紹介でもしてやるか。

さて、あいつのことだから体のちっちゃさを利用して、どっか狭い所に……と、おもって、部屋の角っこ。倒れている箆笥の横に出来ている小さなすき間を覗き込む。が、まあこんな所にはいな……
つて！

い、いたあ

！

マジ単純だなあ！ おい。もう少し別のところ、押し入れとか、冷蔵庫……は寒いか。物置とか、ほかにもいろいろあつただろうが！
もう少し考える。アホ！

と、罵倒してやると、昨晚と同じの、「うるさい！ 貴様誰に向かつて口をきいている！」とか、来ると思ってたんだけど、案外予想とは違う発言が返ってきた。

「黒いのが出たっ！ 真っ黒いの！ ぶわああっ！ って！」
ちよつとまで。訳が分からん。

お前が勝手に作ったシナリオなんじゃないか？

「違う違う！ 黒いの！ 飛んできた！」
混乱しているようだ。

俺が、また、突っ込みを入れようと口を出そうとした瞬間、どたとたと、明音が上から下りてくる音と、音もなく、いつの間にか後ろにいた、レイと、隆生。三人が集まったところでもう一度リピートさせてみる。

「だからっ、黒いのがきたの！」

……どうやら、こいつは標準語っつーのか？ そんなものを覚え

つたつぽいな。しかも微妙に、幼女バージョン的な感じに。やめさせるか。

ごんっ

鈍い音。軽く頭の上にゲンコツを落としてみた。

「痛っついわあっ！ 何をする、夢稀！」

いや？ 俺はその口調を直してもらおうと思ったただけだが？ つーか何処で覚えたんだそんな言葉使い。

「むう……いいではないか。別に。それよりもっ黒いものが飛んできおつたのだ！」

俺は目を白黒させていたんだと思う。嘘にしては、しつこ過ぎるのだからな。まったく、本当だとしたらって考えたりしてしまうではないか。まあ実際は嘘なんだろうけどな。

「嘘をついてるでしょ？ 貴女。」
珍しくレイが喋った。そして相手をじっと見つめる。……一ミクロンも動かない。

次第にエレナはその視線に耐えることができなくなったのか、だんだんとそわそわし始め、挙動不審になって……

「すまん。」

やっぱり。なんかありそうだったけどな。

ごんっ

本日二度目の鈍い音。軽く頭の上にゲンコツを落としてみた。やっぱりエレナは顔をしかめ、ゲンコツされたところを押さえながら、こちらを睨みつけてくる。逆ギレる可能性大だな。

「くるうあ！ 痛いではないかあ！ 本日二度目だぞ。」

やっぱり逆ギレた。

「やっぱりとはなんだ、やっぱりとは」

あれま、口に出してしまっていたか。しょうがない

「そりゃあ、なあ？　予想通りの反応だったし。」

「悪かったなあ、単純で！」

「誰も単純とは言っていないぞ。」

「むぐぐぐぐぐ……うるさい！」

レベルの低い言い争い、と、そこにいるメンバーの三人はそう思ったであろうな。恐らく。でも、俺は違うぞ？　断じて。信じてくれますよね？

「……まあそれは置いて、とりあえず、隆生には紹介するわ。

この子がさっき言ったエレナって子。ヨロシクしてあげて。」

……うわ、置いとかれたよ。

まじで悪かったな単純で！

一方隆生は興味津々で、にこにこエレナの方を見ている。おまえ、ここならいいけどどっか別の人がたくさんいるところだったら犯罪者だぞ。

「わかった。じゃあ……エレナちゃん？　僕は隆生。ヨロシクね」

「よろしく頼む。隆生とやら」

軽く微笑み返すエレナ。俺の時とは大違いだな、畜生。

「まあまあ……しょうがないでしょ？　ユウの場合は話を聞いていろいろんな意味でダメだったと思うし」

いろいろんな意味とはなんだ。

「隠れてる時点で怪しいでしょ」

そこからか。もういい。……飯でも作るか？

「そうしよっか」

って言うことで、二人は隆生に任せて、俺ら二人は夕御飯を作ることにした。

黒い、闇しか存在しない真っ暗なところ。そこに一つの周りの漆

黒よりももつと暗い色のローブを頭までかぶって立っている人間がいた。その人間の、フードの下の顔は見えない。その人間は暗闇に少年のような声で問いかけた。

「ねえねえ、次はどうする？ 前の時は時間切れだったけど、次は？」

暗闇の中心、核の部分にあたる所に暗闇が集まっていく。その暗闇はぐちゃぐちゃと、ぐちゅぐちゅと混ぜ合わさり、だんだんと人間の形になっていく。その人間の形の暗闇は小さく少女くらいの形になって髪の毛の部分と思われる長い物が伸びていく。時折、要領に入りきらなかつた闇が、ぐちゃつと落ちていく。だんだんと色つくところには着色され、ほぼ完全な体が出来上がった。ただ、人間の部分で言う『眼球』と呼ばれる部分が片方だけ、なかった。

「そうね、今すぐにも行く？ で、逝かせちゃう？ ナオ」

「うん。いいねいいね、ハルカ。そうそう、これはお返しするよ？」

君の眼、でしょ。」

「あら、持っていてくれたの。……光栄ね。」

ガラスでできたビー玉より少し小さい丸い球体 なかにLe

B a t t e l e u r という文字が浮かんだものをハルカと呼ばれた少女に渡す。その少女はそれを受け取るとそのまま口に放り込んだ。ぐちゃぐちゅと、何度か咀嚼した後ゴクリと飲み込んだ。すると、先ほどまでなかった『眼球』と呼ばれる部分が、金色のそれが出てきた。

「うん。悪くないわ。じゃあ、久しぶりだから確認してみようかしら。」

そう言い、Le B a t t e l e u r と、呟くと目の位置からいろいろな文字、それは英語でも中国語でもフランス語でもない、この言語かわからないような言葉だった。その文字は少女の手に群がり、そして覆い尽くす。時折、ビクンと手が痙攣するが、その文字式が消える頃には、手には立派なボウガン、全体が紅色に染まったロングバレルのボウガンが手に装着されていた。少女ははあと小さ

く溜息をつきながら言った、

「残念ね。遅すぎ」

「いいじゃないか。そのための僕なんだからさ」

そう言い少年はフードを取り中の長い茶色の髪を露わにする。そして
膝き、少女の手の甲に軽くキスをする。

「では行くわ。よろしく頼むわよ？ ナオ」

「御意。御主人様……」

そう言うと、先ほどの少年の髪の毛は黒に染まり、顔の目の部分
には昨日夢稀が気絶させられた時にいた少年の仮面が取り付けられ
ていた。

そして、少女の顔には、怖いほどの金色の目が光っていた。

第参章「プラス、マイナス。」plus or minus (前書き)

どうも。零詩です。二話目からずいぶん間が空いてしまいました。
すみませんでした。これからもっとスピーディに書いて……いけた
らいいなど、思います。

それと、一話を少し短くしてみました。続きは近いうちに出せると
思いますので、宜しくお願いします。

第参章「プラス、マイナス。」 plus or minus

「ねえ、ユウ」

一緒に夕飯を作ることになった俺ら。初めは無言で野菜をしていたが、急に明音が声をかけてきた。野菜を切る手を止めないままで話を聞いてやることにした。のだが、わけのわからない返答が返ってきた。

「良い方と悪い方どっちから聞きたい？」

何がだ。

「なんでもいいから。早く選んで」

そう言うのは普通はいい方から聞くんじゃないのか？ ってことで、良い方から。

「えつと、エレナのことなんだけどさ……私もちよつと調べたんだよ。そしたらさ、凄いねえ、あの子。自分でも言つてたかもだけど、『元』古代エジプト、呪占具の起源の場所のしかも呪占具ができたときの王妃だつてさ。で、呪術学の第一人者さ。それで、あの子ちよつとした呪術なら体に染みついていてから使えるんじゃない？」

それがいい方か。

「うん。そう」

あまりいい情報じゃないと思うぞ。それにどこから仕入れてきたんだ？ んな情報。インターネットにも本にも載つてねーだろ。

「え？ あの隆生の本に書いてあった。あの頃にはもう蘇つていたんだつて。古代文字と英語で読みづらかったけど」

それを読めるお前らを尊敬するわ。俺は。で、それだけなのか？ いい情報つてのは。と本日二回目の言葉だが。

「うん。そう」

それを聞くのも本日二回目なんだが。もういい。悪い事とは？

「えつとね、前に襲われたでしょ？ 私らのところにえつと……『聖戦領』つてのが来たつしょ？ あれね、本来はあの子を狙うため

にできたものなんだって。あの子が災厄を呼んだって考えたとある人の子孫や支持者たちの集まりなんだって。だからあの子が此処にいるってことは……」

俺らが狙われると。

「まあそういうことになるんだけど。……ああ思い出した。もう一個あった。はい、これ」

そう言っただけで差し出した手には小さな正方形で囲まれた物体。いわゆる立方体があった。全面すべてが漆黒よりも黒い黒で覆われていた。そして異様な気配を漂わせている。小さいのに明音の手のひらに比べれば大きい。大きさをよそよそしくしてくる。何だそれは？ と言いたくなるくらいに怪しいものであった。

「これは、呪占具の始まりの結晶。これに人間や動物のそこらへんにある呪いや恨みを吸収して、強くなる。……初めっから初期値は決まってるんだけど、魔術師の力とかによって決まる。私の場合はこれが精一杯だった」

んなことでもいいわ。はよ捨てて。んな危なっかしいもん。

「話は終わってないし。最後まで話聞こうね？」

う、うるさい。で何だ？

「これ、見て」

一言で用件を終わらせると、今度はポケットから長方形のカードのようなものを取り出してきた。カードには、俺には到底読めるはずもない古代文字と、二輪の戦車のようなものに、王冠をつけた若人。つまりは王子、または若い王様が乗っていた。

「このカード、呪霊譜ね。……レプリカだけど、数十秒の間なら同じ力を発揮できる。じゃあいまから実験ね？ これと、これを合わせるとうなるでしょう？」

知るか。

「えー、つまんないしい……正解は、こうなる」

そう言いつつ、右手に立方体、左手に呪霊譜を持って、呪霊譜を立方体に押し付ける。その瞬間に、呪霊譜が鋼色に淡く光りだしたか

と思うと、今度は立方体の方に変化がっあった。くわ、と口のようなものが出てきて、猫の耳のようなものが生えてきた。そして形も丸みを帯びてきた。いや、結構可愛いもんだぞこれ。怪しいオーラは放ったままだけどな。むしゃむしゃっ、っ音を立てて呪霊譜にかぶりつく。まるで猛獣のよう。そして前言撤回する。全部食べ終わると、物足りなさそうに口と思われるそれを力チ力チと鳴らせるで、喋る。

『もつと、食べ物ない？ 腹が減ってしょうがないんだけどさあ……ねえ、御主人様？ 聞いている？ 食べ物ほしい……』

御主人様と呼ばれた明音はあはは……と苦笑いしながら頬を掻く。

「いやあ……あいにく、もう君消えるしね、ダメだよ」

『えー……じゃ、そゆことで、ばーい』

音を立てて……なんてことはなく、普通に跡形もなくという表現がぴったりのような感じで消えた。

じゃ、まず聞こう。で、答えは？

「まだ分からないの？ 呪霊譜を使うと、特に呪いを受けなくても人間の憑依して呪占具となれるの。あ、ちなみに普通の、一般的な呪占具よりも数倍から数十倍の力を持つてね。だから、そんなのがここいらに何人も来られちゃ、困るわけよ。

だから、あの子をどうするの？ これから。私としては、置いておいてほしくないと思う。ユウのためにも。……これが、ユウにとつての悪い情報ってことになるかな？」

んなこと言われても頭の弱い俺にはよく理解できん。だが、ここにおいてもいいと言ったのは俺だからな。一応はここに置いておくことにする。

それを聞いた明音は、小さくため息をつきながら言った。

「まあ、ユウが言うならそれでいいけど……いつも私やレイがいるとは限らないから、注意してよね？」

おう。でも、いるときは頼む。俺の能力じゃ何も戦えないからな、せめてサポートだ。

「分かってるってば。いる時には全力で、いない時にも頑張ってるから。私はユウを」

二人はそう言うと、自分の仕事に戻った。二人が作った今日の夕御飯は格別においしくなりそうだ。

だが、今日の夜は長い。長くなる。きっと。

第肆章「質問」(question)

コトン。

沈黙の中、隆生が置いた湯のみの音がした。

「いつもながらさ、美味しいよね？ 二人が作った料理って」

「でしょ？」

隆生がいつものように、礼儀正しく口元を拭きながらニコニコ顔で
そう料理を褒めた。それに対して、明音は嬉しそうにしている。何
よりだ。レイはいつも通り無反応だがいつもよりは満足している様
子。ただ……一人だけ、難しい顔をしている奴がいる。誰だか分か
るか？ 誰にだってわかるか。

はいっそうです。エレナさんでさあ。……何考えてるんだか。まあ、
また聞くと、「surnaturel(呪うぞっ!) ! !」
とか言われそうだから、今はそっとしておこう。

で、どうする？ これから。明音とレイは近いからいいとして、隆
生、お前どうするんだ？

そう言っちゃったら、すぐに答えが返ってきた。

「ああ。僕は大丈夫だよ？ 親にも連絡っていうか、あと一週間く
らい帰ってこないしね。だから泊まっていいかい？ 夢稀？」

さいで。

俺はもう構わん。どうにでもなれってんだ。って心の中で叫びたく
なつたよ。まあいいか。

「さんきゅ」

そう隆生は告げると、「たぶん二階の奥のほうにある部屋が空いて
るはずだよな。そこ借りるよ」と言い何故があった、荷物を運び
に二階に上がっていった。……入ったのが数回なのによく覚えてら
れるな。まあいいが。

で、お前らはどうする？ 送っていくか？

「……いい」

そうか、じゃあレイはまた明日……

「私も泊まる」

そうか。なら安心だな……つてええ！ 何故にレイも？

「……いいじゃん」

久しぶりに俺にたいして、ためて話したな。オイ。

「……私は、いつもの場所使う。だからいい。問題ない」

そうか。それなら問題な　くないよな。普通に。

「……」

レイも無言で上の階にとたとたと上がっていく。もういいや。で、
明音はどうするんだ？ おそらく、私も泊まってく！ とか言いだ
す可能性が大アリだが。

「言いたかったことを先に言わないでよ……」

むう。とほほを膨らましながら不満げに言ってくるが、すぐさま顔
の表情を変える。

「じゃ、そゆことで」

……女つて皆あんな風にすぐに表情を変えれんのかなー。とか、突
つ込む場所を間違えたくらい唐突だった。

気がついたらエレナも二階に行っているし、もう既に一階には俺し
かない。二階の部屋には、六部屋あって、一つは俺の、一つは親
父のだから、何年振りだろうって感じに部屋がすべて埋まった。

やれやれ。どうせ明日は休みだし。どうにでもなるか。

そう考えて、俺も二階に上がる。

さて、隆生のところにも行くか。いろいろと相談したいこともあるしな。

こんこん。

造りは和風だが、ドアは洋風。プライバシーを守るにはちょうど
いいか。……レイはともかく、明音の着替えを偶然目撃した日にゃ
一瞬天国、半日地獄、みたいな感じだろうな。

おい、隆生。入っていいか？ 聞きたいことと話したいことがある。
「うん？ いいよ」

ドア越しに声が返ってきたのを確認してから部屋に入る。特に俺の部屋と変わらないが、何処か雰囲気が違う。隆生な感じが出る。短時間でよくこの雰囲気を作れたな、と俺は思った。

「で、何？ 話して」

そうだそうだ。まず聞きたいのはエレナのことなんだが。

「あの子のこと？ 別にいいけど。あ、あの本はあるよ、ちゃんとここに」

本を自分の学校指定のバッグから取り出し大切そうに、自分の膝の上に乗せる。

その行動が、その本を大切にしていると感じるのと同時に、俺の眼や、明音、レイ、エレナの存在を肯定してくれているようで少し嬉しかった。

ふと、唐突に隆生が話し出した。

「そうそう。あの子のことについて、で、こっちから聞きたいことがあるんだけど。良いかな？」

もちろんだ。言ってみろ。それを聞いてから俺の質問に答えてくれ。「了解。あの子狙われてるでしょ？ この本に書かれている人たちの末裔やらに。これからどうするの？」

若干丸眼の瞳を少し鋭くさせて聞いてきた。先ほどの明音と同じことを。むう……こう聞かれると、答えにくいのだが、しようがない。一応は此処に置いておく。俺の所有物にもなっているし。

……これが俺の答え。どうだ？

「自分の命が狙われたとしても？」

また少しばかり眼光が鋭くなった気がする。

俺は、自分のものは自分で守るから、大丈夫だ。安心しろ。

俺は、エレナや、レイ達を、普通の人間に戻す。特にエレナはある意味世界がかかっているといっても過言じゃないからな。

「……そう。ならよかったよ。じゃ、そっちからの質問にも答える

よ

さつきも言った。エレナのことだ。まず、帰る時お前が訳してくれていたところを見せてくれないか。

「うん。いいよ」

そう言つて、パラパラと本を捲る。真中より前の方のページで捲るのをやめると、先ほど隆生が訳したと思われる、文字と、何やら黒装束のようなものを着た、仮面男たちの集団が絵の中央にある漆黒の球体に武器を向けている絵があった。その球体はよく見ると漆黒は漆黒でも、微妙に色に差があつて、少しだけ明るいところを見ると、小さい球体が二十三個あつて中央のその球体の核と思われる小さな球体を囲んでいた。球体には読みないが文字と思われるものが描かれていた。その球体はまるで、全てのものを喰らい尽くしてしまふ様な、そんな雰囲気その絵からも見て取れた。

この球体は果たして何なのだろうか。そう考える前に自分の脳が結論に達していた。

……………エレナだ。

今は全くそうではないが、おそらく、そうであろう。で、隆生に改めて聞く。

……………これは、なんだ？

第五章「答え。」(answer)(前書き)

はい。以前間違えて投稿した者の加筆・修正版です。全然更新できていませんでした……すみません。必死に努力します。

第五章「答え。」(answer)

これはなんだ？

その問いに、隆生は少し顔に影を落とす、……あまりいつものニコニコ顔に変化は見られないのだが、って、そんなことはどうでもよい。こちらに話しかけてきた。「一応先に断っておくね？ この話を聞いて、エレナちゃんへの態度を変えないで欲しいんだ。結構惨いことかも僕が言っちゃうかもしれない。でも、それを聞いてエレナちゃんを嫌いにならないでほしいんだ。それはお願いしてもらえる？」

やけに真剣に俺に聞いてくる。まあそんなことを言わずとも、態度を変える必要はないさ。それに該当する理由が見つからないからな。何故それを気にするのかはおいておいて、そういうことだ。隆生。

「そう。ならよかった。安心して話せるや。じゃ、話すよ。」

まず、この絵がエレナちゃんなのか？ の答えは、イエス。まあ今はあんな風には成りはしないと思うけど、実際の、今のエレナちゃんの肉体を持っていない状態のエレナちゃん。この時代に、錬金術が発達して、そこでその錬金術の第一人者の『アンジユ・サンサーラ・ラグレティウス』て人がいたの。その人は、……んゝ簡単に言っちゃうと、人格が狂ってたわけ。で、自分以外の人を信じられなくなつて、そこで、その時にもう忌まわしいとされていた魔女の使っているタロット、今は呪霊譜って呼んでるけど、それを手に入れたんだ、この人。でそれを使って、住んでいた町を破壊し、そこにいる人を殺そうとしたんだ。それで連金したんだけど、やっぱり魔女が使っただけあつて魔力が強い。だから失敗した。もちろんその力で暴走を始めたんだ。その、漆黒の形で。その武器持ってる人たちは、今の聖戦領と呼ばれる人たち。……本当は、この町の自警団的な存在だったと思う。その人たちが攻撃を阻止しよう

としたけれど、悉く破られて殆ど殺されてしまったりで壊滅状態だったんだ。でもそれを見てアンジュはなんて言ったと思う？ 『お！ 我が手によって創られた呪占具よ。良くぞやってくれた！ これで世界は私のものだ！』って言ったんだって。その時に暴走している中に入ってっちゃったから、無残にも跡形もなく消し飛んだんだけどね。でも、創り出した張本人が殺されちゃったから元に戻ったわけで、それをまだ生きていた聖戦領の人たちのもとに渡されただけど、これを持った人が次々に狂っていつちゃってね、仕方なく、海に流した。……それがエジプトにたどり着いて、その王妃、まあ今のエレナちゃんの器なんだけど、が拾った。そして何故かエレナちゃんには呪いが効かなかった。だから、その呪霊譜はエレナちゃんを選んだんだろうね、そのままエレナちゃんに憑依しちやっただ。それを引き離そうとしたけれど、その実験のため引き離すことはできたけどエレナちゃんは死んでしまった。だから、もう一回、呪占具を憑依させて、封印した。それが何らかの理由で解けてしまい今に至る。って感じ。以上説明、終わり！」

そこまで、俺の反応を無視して一回で言い終わる。

俺は正直あまり驚かなかった。……いや、もちろん驚きはしたけどな？ 想像よりは下だったことだ。

いや、でも何かが引つ掛かる感じがしたんだ。

でもそれが何かは分からない。そんな風に頭の中で考えていたら、

ずどおおおおん

ものすごい音がした。たぶん家の壁を吹き飛ばして何者かが入ってきたんだろうな。さて、これからどうすりゃいい？

その音がして直ぐに明音が部屋に入ってくる。特に取り乱してはいないようだ。

「今の音、何者かが入ってきたみたい。レイが今、見に行ってる」
そうか。それじゃ俺らはどうする。いつものように行くか？

「そうしよう。私とレイのバックアップをよろしく。じゃ、行こう」
そう言われた俺は自分の能力を発動させる。右目に能力が宿り、そのまま隆生の方を向くと隆生の右胸のところから無数の道が伸びているのが分かる。未来への道、そして過去、終わってしまった時間の道が崩れそうになりながらも見える。それを見て発動が成功したと確信し、隆生にこの部屋で待っている、と念を押す。ついてこられたら危ないし、正直に言って一般人が入り込むとこっちの作戦の邪魔になる。ああいうのは隆生には見せたくないしな。そのままの君であれ！ みたいな感じになるし。
そんな感じに考えながら少し遅れて明音の後を追っていく。

想像の通りだった。一階はほぼ壊滅状態で、埃か砂かは分からないが煙が僅かに立っていた。一階のちょうど俺らが晩飯を食べていた壁のところは2メートルくらいの穴が開いていた。……こりや直すのに費用が一体いくらなのか……とかとネガティブ思考に陥ろうとすると、すかさず背後から明音の罵声。

「ユウツ！ 何やってんだよ、こっちに集中しな」

分かったよつと。んで、レイ、状況は？ それによって指示の仕方を変える。

「……二人。男と女が一人ずつ。女は右腕にボウガンを装備している、遠距離系と思われる。注意して」
了解。

そういうと、右目に全神経を集中させる。此処にいる人物の中で自分が知らない人物の道のみをその眼で追う。次はどうするのか、何処に何を仕掛けてくるか、的確に読み取り、それを言葉にしなくてはならない。人生の中でこんな体験は5、6回はあるのだが、うわ……こりやいつやつても緊張する……

「………愚者式競技場、展開。………明音！ ミノタウロスを使用

！ 男のほうに集中しろ！ レイはそっちの女の方へ！」

「了解！ …… 『怒レル雄牛ノ斧』！」

「……了解」

愚者式競技場、手のひらサイズの小さな箱のような正方形で、一辺に小さな門がついている。これは数年前に拓煉がどっかの奴から回収してきたもので、これを使用している間は25メートルくらいの生き物へのダメージ以外のダメージを無効化できるのだ。それを開門させた後、双方へ簡易な指示。レイはその言葉を聞くと同時に女の方へ突進していく。明音には使用する異次元人を選択する。そう言うと彼女の姿は見えないが、この眼で見ることが出来る。そう明音が呟くと、明音の体に変化が、見られるようになった。まず瞳の色が変わった。いつもは温和な明るい茶色をしていた目が、黄金色にひかり白目の部分が黒くなった。まるで猛獣のような獰猛な目。そして頭には左右アシメントリーな角が生えてくる。一見クワガタのような角なのだが螺旋状に巻いている。そして右の角は自分の知らないいつか遠い昔に戦闘を行ったときにへし折られてしまっているようで、短かった。右手には巨大な、これも刃の部分が黄金色に輝く大斧が握られている。それを持つている右腕は肩から着ているものを僅かに肌蹴させているが特にそういう気持ちになるような女性的な肌ではない。もつと筋骨隆々と呼べるような腕が見えていた。そのせいで明音の体は幾分かバランスの取れていない体になっていた。

彼女はずっと、ずっと昔の連金術者に別の世界と、現世を繋ぐ狭間を『組み込まれた』人間。この世界とは別の世界の住人を使用することが出来る。

ミノタウロス、古称アステリオス。その名の通り、星と雷を操ることが出来る。ミノタウロスの斧はそれを司り、自在に操り、自分の前に立ちほだかる邪魔者を完膚なきまでに叩きのめすことができる。しかしそれには 代償を要するが。そしてその代償は使用した者の命を削るといふ。しかし明音にとってそれは何の問題もない。

狭間を組み込まれた人間だから、命という概念が存在しない。それは死んでいるのかもしれないし生きているのかもしれない。だがこれから先に死ぬ事はない筈だ。だから何の躊躇もなく使用することができる。

「……では。いきますよ？」

明音の声が明音に今、宿っているミノタウロスの声とシンクロし二重音になっている。ひとつは明音の声で、もう一つは紳士的な男の声だった。その声の一つで明音は男のほうに走り寄る。男は初めは驚いたそぶりを見せつつも逃げずに明音を真っ向から無数の黒い腕で絡め取るうとする。その無数の腕は先日自分の首を絞めたものと同じものだが数が違った。多い。幾つもの硬質化している黒い腕が男の背中からわしゃわしゃと伸びている。一本一本が独立した動きを見せて、明音を襲いにかかるがそんなものは今の明音の足元にも及ばない。こちらから指示する必要もないだろう。こちらから見る限り伸びてくる腕を完膚なきまでに刻んでいる。時に斧で真っ二つに。時に斧から放出される雷の力で。破壊された腕は砂と化して散っていく。

レイの方は圧倒的にレイが押しているように見える。手に握られているのは一般市民が手にするといけないもの、とても物騒な物が握られている。俗にカッタラスと呼ばれる短刀。物で相手に斬りかかる。連続して斬りかかっているレイの攻撃を下がりながら避け、時には右手にあるボウガンでガードしたりする。カッタラスによる攻撃、首の部分に右側部から斬りかかった、しかしこの攻撃はフェイク。この攻撃をよけようとし女は体を翻して避ける。そして避けた瞬間にはわずかな隙ができる。そこに左手の拳を腹部に入れる、が、対して女にダメージが言っているとは思えない。その攻撃を受けても涼しい顔でレイとの距離をとる。攻撃はしない。何故だ？ なぜ攻撃を行わない……そう思った矢先にボウガンを自分の真横に突き出し矢を構えた。

明音の攻撃は男の背中から生える腕を消し飛ばしていくが、男の腕は減る様子もなく彼女を拘束しようと伸びてくる。彼女は男に一撃を浴びせようとしているのだが近づくことが出来ていない。破壊し、破壊し、破壊する。その動作に疲れたのか、若干肩が上がっている。「おやおや、どうしたの？ 体力がもうなくなっちゃったのかなあ？ とうか、君たちがエレナって呼んでるコを引き渡してくれないかな？ 僕らはそれを破壊しないといけないんだ」

「五月蠅い。若造は黙っている……」

「おお。 女性の言うべき言葉ではないですねえ…… まあいいですか」

その言葉が終わるか否かの時に明音は走り出す。下から掬いあげるような斧でのアッパーを繰り返す。当たれば相当なダメージになるのだが、当たらなければ当然リスクを発生させる。瞬間、視えた。そして咄嗟に叫ぶ。

「明音え！ 右だ！」

「え？」

遅かった。明音が右から来る波動のようなもので飛ばされる。ぐあぁあんっ！ と部屋の側面にぶち当たり、衝撃を壁が伝えて壁に面がついている家具が倒れる。誰だ？ 答えは簡単だ。女が撃つたのだ。女の方を振り返るところらに向けて、ボウガンを構えていて、既に引き金に手をかけている。逃げようにも当たらない可能性の方が低い。……レイは？

レイは男の方の腕に何重にもされて拘束されていた。

「あら…… 殿方はもう三途の川を渡ってくれるかしら？」

そう言うと女は引き金を引いた。咄嗟に目をつぶる。暗転 していかなかった。思考を戻すと、目の前に闇が蠢いていた。

「くく…… 小童が…… 我的能力を使用するなど、百年早い。…… 小童よ、我的瞳、返させてもらうぞッ」

エレナだった。ただついさっきまでのエレナとは違った、なんかこ

第五章「答え」(answer)(後書き)

……そう言えば、キャラの設定があやふやでしたので、ここで一人ずつ紹介したいと思います。……ホントに簡単に。

まず一人目……

名前：中条夢稀 (Nakajou Yuki)

能力：暁ノ零レ夕朝

発動箇所：右目

効果：呪占具の呪いの強さと呪いの種類の判別。

視力の向上と、霧などの時に視界が遮られない。

備考：得意な科目は理科と歴史と音楽。苦手な科目は英語と国語。

一応、こんなものです。もしかしたら付け足すかも知れないんですけど……次は頑張っって早く出します！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9779g/>

タロット黙示録。

2010年10月9日23時31分発行